法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

〈講演再現〉「偽悪の伝統」（『火山列島』の思想）をめぐって

益田，勝実

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文学誌要
(巻 / Volume)
97
(開始ページ / Start Page)
40
(終了ページ / End Page)
45
(発行年 / Year)
2018-03-24

〈Ⅱ　講演再現〉

「偽悪の伝統」（『火山列島』の思想）をめぐって

益田　勝実

（……前略……）

いろんな錯綜したたくさんの説話集が出てきて、また、それをまとめて『古事談』にまとめるようなものもでてくるんですが、そういう状況のあとで、中世の鎌倉時代の一三世紀に、古代説話文学としては一つのピークに達します。その一つが純粋の世捨て人の説話集としての『発心集』。これはそこに書いてあるように、平安朝の仏教に、寺院の仏教に対して別の、別所の仏教ってのが起こります。

例えば、高野山を見てみますと、高野山という、金剛峯寺という本山がございますけども、それに対して東の別所、西の別所、小田原の別所ってのがもう一つあるんですよね。その高野山の外に、正式の僧侶じゃない、高野聖たちが集まってたむろしてる集落ができるんです。いわば難民集落みたいな。

ところが、高野山が焼けますでしょ。焼き打ちに遭っちゃうと、それを再建する。いろんなときに活躍するのはみんな別所の高野聖たち。高野聖ってのは全国に津々浦々に行って、鉱山発掘やってみたり、仏教の伝道をやってみたり、いろんなこと、まじないやったりしますが、また、そこに定着したりしますね。ああいう高野聖というものが出てくる。最後には泉鏡花の『高野聖』って小説になるわけですが。あれ、高野聖が旅の先で不思議な体験をするという話。

ところが、お寺ではなくてお寺からはみ出すっていうか、お寺に入れてもらえないような別所に聖ってものがあるんですね。

聖というものは二種類あるんですね。一つは家を、俗家を捨てて寺院、寺に入った。寺に入って、寺では自分の仏教信仰は貫かれないと思って寺を出た。家を出て寺に入り、寺を出てもう一回また外に出て世捨ての生活に入った。そういう二段階の世捨てをした人。それから、家にいて俗家の生活ができないで世捨てをした。昔だったら私度僧ということになる。私度のすさみになって、勝手に出家した。そういう人たちは寺、寺院に

入れませんから、寺院の外におのずから群れ集まる。

そうして、その仏教寺院の聖地の外郭にそういうアジールができる。これが別所です。今現在、別所という地域がいろいろありますね。今日、お話できませんけど、別府というとこがありますが、あれはまた別なんです。租税関係で別府というものがある。別所というのがありますでしょう。ここでも東京の近くでも多摩なんかに別所っていうのがあります。人の名前でも別所さんってのがいますよね。人の名前、別所、別当、別府とか、いろんな人の名前ありますが、あの中で別所はそういう関係なんですね。

それで、そういうとこに集まった正統、純正仏教の寺院の人たちでない人たちが自分たちで育てた話がある。それは、この前に霊異記（『日本霊異記』）でお話ししたような信仰の説話。彼らの証としての話。それが本当にこの世捨ての世界に適応していこうとする悲しい話ばっかり。その話、いっぱいあるはずですが、それだけを集めて、そういう聖ばなしばっかりを純粋に集めて説話集を作ったのが、鴨長明の『発心集』です。

この前もちょっとお話ししましたが、長明の文学的な作業としては、『方丈記』よりも『発心集』のほうが文学的にもすばらしいということ申し上げましたが、これ、残念ながら誰も認めないんですよ。これは比べてみれば、「ゆくかはのながれはたえずしてしかももとのみづにあらず」なんて、五七調でぺらぺら口の先で小才子が言ってるような文章よりも、真実のこもったすごい切実な説話集の『発心集』のほうがレベルは高い。

ただ、それを読む文学者がくるってるから。だから、『方丈記』って、「記」という言葉にわかるように、あれは方丈の記という、そういう移動可能な家屋を作ったって誇ってるわけでしょ。「記」という文体自体が中国の記という、伝とか記とかいう文体をまねして、こんな文章作ったよっていう。それは、前に『池亭記』という本があって、漢文で書かれてます。私も仮名文でこんなんできるよっていうんで、それで中年の血気に任せて書いたのがあれ。

だけど、本当に世捨ての生活長くするうちに、価値のあるものはこういう文章ではない。文章の遊びではないということがわかって書き始めたのが『発心集』。だから、この『発心集』は、今日、一つしか話、読みませんけど、実に素性のいい、自分たちの境涯の別所に集まった人。

あの人は長い間、大原の別所にいました、京都の大原。そこを出て、今度また、一人住まいをするようになったのが『方丈記』に書かれてる庵。しかし、『方丈記』にある庵に暮らすようになって、ほかの人と一切交渉しなかったんじゃない。彼は、その周りのひじりたち、また大原のひじりたちのところに遊びに行って、それで親交を温めていたことは確かなんですね。

だから、私がこの『文学』[1]に載せてもらって、のちに『火山列島の思想』に入れてる「偽悪の伝統」っていう論文書いとりますが、それは『発心集』をほめ上げた本ですがね。

今、京都大学から成城大学移っているその佐竹昭広くんが、あの中の、「長明孤ならず」という、あの文句は利き文句だね、すごいね、つって何回もほめてくれましたね。佐竹って男は、ろくに人をほめないでしょ。だから、さっきの『季刊　文学』

の鼎談[2]、大岡（信）くんと佐竹くんと僕と座談会やった。それはいいんだけど、そこの佐竹くんは、僕が何かまじめに言うとおちょくるでしょ。そうは考えられないよなって。あれは、僕より年下のくせに生意気でね。（参加者　笑）

ほんで、文学と語学の碩学の声が高いやつだから。だから、何か言うと人の揚げ足取ることをする。あの男がまともに僕をほめたのは、「偽悪の伝統」という論文の中で「長明孤ならず」って。そりゃあ、僕も仕組みがあるんですよ。

『論語』の中の「徳孤ならず」、徳は孤立しない。人が置いておかないですね。徳のある人に対しては、人は必ず認めてくれる。「長明孤ならず」。長明は独りぼっちじゃなかったんだよ。それを『方丈記』にだまされて長明が一人の寂しい境涯を渡ったって思うんじゃだめなんだよ。長明の信仰の友があって、それで励まし合って世捨ての生活。世捨てってことは、物質的によく、どうして暮らしてたんだっていうことばっか人は言うけど、精神的にも大変なことなんです。そういう人たちが大原の別所に集まって暮らしをする。信仰を確かめ合う、励まし合う。そこでできてる話ってのは悲しいんですよね。

その中で特に傾向が、二九枚目の紙の下の段の一一。

「高野のほとりの上人、偽って妻女をもうけり。」これなんかもそうですよ。「偽悪の伝統」と私が言うやつ。偽善ってのは私が一番典型的な偽善者です。しかし、それじゃだめ。偽悪ってのは、私は悪くもないのに、こんな悪い男ですっていうことを人に論証してみせるんですね。誰もが信じざるを得ないほど自分を悪者に仕立てる。それで、ああ、私は誰にも認められるはずのない悪い人間だ。もうこの世の中では適応していけないんだ。一心にこの世の中を厭離する。それをいとって、厭世の志を高めていこうという仏教の一つのやり方。これは高い地位に上ろうとして早く僧綱の位につこうとしてる坊主の世界ではあり得ないことですね。これは世捨て人たちの、ひじりの、で、これは、そこの。上人ってのはひじりのことですが。

（以下、『発心集』本文朗読）

十一　高野の辺の上人、偽って養女を儲くる事

高野の辺に、年来行ふ聖ありけり。本は伊勢の国の人なりけり。おのづからかしこに居付けたりけるなり。行徳あるのみならず、人の帰依にて、いとまづしくも非ざりければ、弟子なんどもあまたありける。

年やうやうたけて後、殊に相ひ憑みたる弟子を呼びて云ひける様、「聞こえばやと思ふ事の日比はんべるを、其の心の内をはばかりて、ためらひ侍りつるぞ。あなかしこ、あなかしこ、たがへ給ふな」と云ふ。「何事なりとも、のたまはん事、いかでたがへ侍らむ。又、へだて給ふべからず。速かに承らむ」と云へば、「かく、人を憑みたる様にて過す身は、左様のふるまひ、思ひ寄るべき事ならねども、年高くなり行くままに、傍らもさびしく、事にふれてたつきなく覚ゆれば、さもあらむ人を語らひて夜のとぎにせばや、となむ思ひたるなり。

其れにとりて、いたう年若からん人はあやしかりなん。物の思ひやりあらん人を、忍びやかに尋ねて、我がとぎにせさせ給

へ。さて、世の中の事をば、其れにゆづり申さむ。唯、我があり つるやうに、此の坊の主にて、人の祈りなんどをも沙汰して、我をば奥の屋にすゑて、二人が食物ばかりを形のやうにして、贈り給へ。左様になりなむ後は、そこの心の内もはづかしかるべければ、対面なんどもえすまじ。況や、其のほかの人には、すべて、世にあるものとも知るべからず。死に失せたるものの様にて、わづかに命つぐべくばかり沙汰し給へ。此れをたがへ給はざらむばかりぞ、年来の本意なるべし」と、かきくどきつつ云ふ。

あさましく、思はずに覚えながら、「かやうに心おかず語らはする本意に侍り。急ぎ尋ね侍らむ」と云ひて、近く遠く聞きあるきける程に、男におくれたりける人の、年四十ばかりなるありけるを聞き出でて、ねんごろに語らひて、便りよきやうに沙汰し、すゑつ。人も通さず、我も行く事もなくて過ぎけり。

おぼつかなくも、又、物言ひあはせまほしくもあれど、さしも契りし事なれば、いぶせながら過ぐる程に、六年へて後、此の女人、うち泣きて、「此の暁、はやをはり給ひぬ」とて来たる。

驚いて行きてみれば、持仏堂の内に、仏の御手に五色の糸かけて、其れを手にひかへて、脇足にうちよりかかりて、念仏しける手も、ちとも変はらず、数珠のひきかけられたるも、唯、生きたる人のねふりたるやうにて、つゆも例にたがはず。壇には行ひの具うるはしく置き、鈴の中に紙を押し入れたりける。いと悲しくて、事の有様をこまかに問へば、女の云ふ様、「年来かくて侍りつれども、例のめをとこの様なる事なし。夜はたたみを並べて、我も人も目さめたる時は、生死のいとはしき様、浄土願ふべき様なんどをのみ、こまごまと教へつつ、よしなき事をば云はず。昼は、阿弥陀の行法三度事欠く事なくて、ひまひまには、念仏を自らも申し、又、我にも勧め給ひて、始めつ方二月・三月までは心を置きて、『かく、世の常ならぬ有様をば、わびしくもや思ふ。さらば、心にまかすべし。もし、うとき事になるとも、かやうに縁を結ぶもさるべき事なり。此の有様を、ゆめゆめ人に語るな。もし又、互ひに善知識とも思ひて、後世までの勤めをもしづかにせむとならば、こひねがふところなり』とのたまひしかば、『さらさら御心置き給ふべからず。年来相ひ具したりし人をはかなく見なして、いかでか、其の後世をもとふらはざらん。我も又、かかるうき世にめぐり来じと願ひ、厭ふ心は侍りしかど、さても一日たちめぐるべき様もなき身にて、本意ならぬ方にて見奉れば、なべての女のやうにおぼすにや。ゆめゆめ、しかには非ず。いみじき善知識と、人知れず喜びてこそ過ぎ侍りし』と申ししかば、『返す返すうれしき事』とて、今隠れ給へる事もかねて知って、『終らむ時、人にな告げそ』とありしかば、かくとも申さず」とぞ云ひける。

（『新潮日本古典集成　方丈記・発心集』（一九七六年、新潮社）より）

で、私は、この女犯を犯したくなったから、だから、茶飲み友達を探してくれと言って、それで自分の財産をみんな弟子にやって、それで同じ家で暮らすけども、一切交渉しないで、それで何年もたって死んだ。

ところが、実際は、そのことによってますます世間の人からもう忘れられて、あの人間はいないんだと。いたつっても破戒な女犯を最後には犯して、それでこの世の中で抹殺すべき人間だ。思わせておいて、自分はひたすらに世捨ての道を進む。

これ、訳しましたらその前に、こういう世捨てひじりの話の源流になる話があるんですが、それは略しました。玄賓僧都っていう、僧都の高い位についた人ですが、この人が、ある日、漂然といなくなるんですね。桓武天皇が大変尊敬してたんです。ところが、ある日、その弟子が全国を行脚して回ってるときに、渡し守見るんですね。ところが、その渡し守のこじき坊主が村の人から一切金を取らないで、それで村の人に渡しの便宜を図ってる。自分が乗せてもらうと先生なんですよ。お師匠様って言って、それでとにかく今は船を渡さなきゃいけないから。で、じゃあ、今、また訪ねてまいりますからと言って帰ってくると、もうそのとき、船を向こうの岸に戻して逐電しちゃう。

村の人にも、あの人、どこから来た人かわからんけれども、私たちの交通不便を助けてくれて、長年にわたって渡し守を報酬なしでやってくれた。それは消えてなくなる。

その話のまた別の話がありまして、今度、よそに行って作男になって働いてるんですね。これも報酬もらわない。そういう、中央の大寺院の僧都だった人が、その地位を捨てて逐電して世捨ての暮らしに徹底してという、そういう話がありますが、この玄賓僧都なんかはそういうひじり話の一番年代も古いもので源流。

今日、お話できないけど、平等供奉という人がありますけれど、比叡山にいてお坊さんだった。かねがね、どうもこういう出家の暮らしがいいかって、自分で疑問を持ってる。都の天皇の祈祷僧として供奉という位を持っている人です。その平等供奉が、ある日、便所に入って、かわやに入って、それでいなくなる。みんなわからんですね。かわやの扉の前にはこの人のげたが置いてあるんですよね。げたを置いたままでかわやの窓から向こうに抜けて逃亡して、それでいなくなる。その人が後半生になって、やっぱり地方に行って、それで渡し守のような奉仕活動をして一生を終えてしまう。そういう話もありますし、そういう悲しい……

しかし、その根拠は、人に自分が人様のためになってるとか、真剣な信仰者であるってこと、気づかせないってことなんですね。ただ気づかせないじゃいけないから、みんなに誤解を招くように誤解を招くように行動するんですね。だから、うん、女性を欲しいとか、女犯を犯したとかね。それで、誰も見下げ果てたやつだっていうことにしておいて、それでひたすらに純粋の自分の信仰をする。それは、私はいろいろ考えたけど、偽悪って好きで、偽悪の伝統が。

しかし、この偽悪の伝統という日本の思想史の一つの時代というものはやがて消えていく。消えていくってのは何かっていうと、そこで法然と親鸞が出てくる。法然という人は他力の信仰の世捨てということを主張するんです。それはもう徹底的に推し進めたのは親鸞でしょう。親鸞になると、大体救われたいという、浄土に生まれたいという願いを立てることさえも、それはけしからんと。われわれが救われるか救われないか、そん

なことわからん。救うほうは阿弥陀様の勝手だ。阿弥陀様が救わないはずがない。

われわれがこの世でどんな極悪人であろうとも善人であろうとも救われる。のちに、親鸞の言行録である唯円の『歎異抄』に、「善人をも往生す。況んや悪人をや」という言葉がある。しかし、これは浄土真宗の中で疑問になって討論重ねられてる言葉です。「善人をも往生す。況んや悪人をや」って。悪人を救わないことがあるかって、うそだ。悪人だから救われるんで、善人は救われるかどうかわからんが、阿弥陀様、救うだろうって逆にいう。

善人さえも救われるが、「況んや悪人をや」って言い方は、ちょっと親鸞的ではないっていうんで、宗派の中でもめてますがね。

しかし、やっぱりどちらがいいとは言えないけど、悪人とか善人とかかわりなく、阿弥陀様は迎え取ってくださるというのが他力の信仰でしょう。そういうとこでは、生きてる最期に人に憎まれるように憎まれるように世の中で誤解されるようにして、それで、ああ、世の中ってものは私は適合できない世界だ。人もみんな私をこの破戒無慙な人間と思ってる。というふうにして境涯を作ってはじめて厭離穢土の、その心を深めるって必要はないっていうことなんです。だから、他力の信仰で、それ専門の宗派が天台から分かれて浄土宗になったり浄土真宗になると、こういうのを言わば、無駄なあがきっていうことになるんですよ。だから、偽悪の信仰者は消えてなくなる。

（……後略……）

注

（1）『文学』（三二巻一号、岩波書店、一九六四年一月）

（2）『季刊　文学』（一巻一号、一九九〇年冬号、岩波書店）所収、〈座談会〉「研究の対象としての文学―学から楽へ・楽から学へ―」［参加者：高橋康也・佐竹昭広・益田勝実・大岡信（司会）］

◆編集部注◆

この講演録は、一九九〇年三～四月に開かれた、岩波市民セミナー「日本説話文学の展開」のテープ録音の一部を活字化したものです。音源を提供して下さった岩波書店には、衷心より御礼申し上げます。

二〇一七年七月二九日に開催した法政大学国文学会では、そのテープを会場で流しました。